

森の木魂（こだま）

2024年01月24日発行 第12号

目次

・新年のご挨拶	1	・樹徳高校の皆さんを迎えて	8
・森に寄り添う人間性を磨きたい森づくり20年	2	・お茶会レポート	9
・守る！神宮の森	4	・足尾発！	14
・アドバイザーからの提言	6	・南相馬発	15
・足尾の森の仲間たち	7	・ミムシ・編集後記	16



新年のご挨拶

森びとプロジェクト会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。

森びとプロジェクト代表として新年のご挨拶を申し上げます。2024年が会員の皆様にとって活躍の年となることを心からお祈り申し上げます。さて、昨年は森びとプロジェクト代表としてのはじめての年で戸惑うことばかり、皆様のご支援により無事一年を勤めることができました。改めて御礼を申し上げます。昨年は猛暑が続き、地球温暖化を実感させられる一年でした。しかしながら、この一年間には、様々なことが起こった一年でもありました。ロシアのウクライナ侵攻は続き、イスラエルによるパレスチナガザ地区への侵攻など、地球の人類にとって耐え難い戦争という現場を目の当たりにした一年でもありました。また、東京では明治神宮外苑再開発による樹齢100年以上の樹木伐採の計画が表面化し、森びとプロジェクトとしても樹木の伐採を見直すよう東京都に申し入れました。この計画については、世界からも大きな批判を浴びている計画とな

っており、東京都も伐採計画の見直しを迫られているところです。

森びとプロジェクトでは、足尾の森の再生やエコ散歩 in 東京、そして南相馬市鎮魂復興市民植樹祭への支援と海岸防災林の手入れなど、「山と心に木を植える」のスローガンの下、植樹活動に取り組んで参りました。皆様のご協力に感謝申し上げます。

今年は森びとプロジェクトの活動がさらに重要さを増す一年であると感じております。会員の皆様には改めてご協力をお願い申し上げますとともに、多くの市民にも森が命を守り育む重要性と地球温暖化防止への活動へのご協力を訴えて参ります。これまでの活動をさらに強化できるように力を合わせて取り組んで参りましょう。森びとプロジェクトの活動が命を守り、地球温暖化防止につながることを確信し、皆様の幸せにつながる活動をさらに強めていきます。皆様の活躍とご健勝をお祈りしてご挨拶と致します。

代表 桜井勝延

本年もよろしくお願ひいたします。



桜井代表



【運営委員会】

●アドバイザー

川端省三（法人職員）

倉澤治雄（科学ジャーナリスト）

高橋佳夫（森びと探究者）

中村幸人（東京農業大学名誉教授）

山崎 誠（衆議院議員）

●運営委員

代表 桜井勝延（南相馬市市議）

副代表 清水 卓（法人職員）

委員 井上 康（元林野庁職員）

委員 大野昭彦（植樹ボランティア）

委員 大山博延（会社員）

委員 小黒伸也（会社員）

委員 小林 敬（会社員）

●会計監査員

笹沼 信男（会社員）

高橋よし子（無職）

森びとの事業

森に寄り添う人間性を磨きたい森づくり 20 年

2024 年は森づくり活動をはじめて 20 年を迎え、2025 年は煙害地跡に木を植えて 20 年です。

国策によって足尾の山（森）はハゲ山になり、人間が手を入れない一世紀以上も草しか生えない旧松木村の荒廃地。本当に森ができるのだろうかと不安を持ちながらも、“山と心に木を植える”という合言葉を胸に、ふるさとの木による命を守る森を育ててきました。多くの方々の情熱と協力・支援を賜り、その後は手弁当で年間 100 日以上 of 献身的な育樹活動によって当初の不安を吹き飛ばしてくれました。20 年前の荒廃した草地跡は小さいながらも命を守ってくれる森に生長していると体感し、森づくりに関わってくださった皆さんへ心より感謝しています。



樹々の樹高は 15m 程になり、小さな森は落葉広葉樹の四季折々の美しさを恵み、ツキノワグマやアナグマをはじめとした生きものたちが命を繋ぐ棲息地となり、自然災害にも耐え抜き、生きものに欠かせない酸素や水を供給しているようです。2 年前からは大雨や雪解けによる土砂流出を防ぐ低木を植え、人間と他の生きものたちとの息づかいが体感できる環境をつくってきました。今年は、森づくり 20 年をまもなく迎える足尾の松木村跡地の小さな森を多くの皆さんに観ていただきたいと願っています。

中倉山の頂から見下ろす松木村跡地の森は小さな森です。写真を見ればわかるように、私たち人間にはこのガレ場や草地を「命を守る森」にする責務が明々白々ですし、地球規模では人類の緊急な責務としての温暖化対策の実行につながっていると言えます。森づくり 20 年を迎える私たちの森づくりはこれからが本番だと思います。



煙害や地球温暖化も、そして戦争や紛争も人間の傲慢な「人間活動」の行き過ぎであることは言うまでもありません。文明は、人間が森に生かされているという冷厳な現実を忘れさせてしまっているようです。それは昨年末の COP28 合意に表れているように思います。温暖化の原因である二酸化炭素排出の削減目標の実現は締約国のやる気に任されています。



中倉山山頂から見る植樹地全景

す。結果は大気中に二酸化炭素を累積させ、地球を温め続けています。「エコシステムが健全な状態で持続していることが人間活動の前提条件」というところからの温暖化対策が実行されていないようです。

毎年、ますます巨大化している世界規模の熱波、干ばつ、森林火災、豪雨による災害と生存が脅かされている不安定な日々。そして世界を分断させている政治と戦争や紛争等をかかえている私たちですが、20 年間の森づくりで培った“森に寄り添って生きている人間の心得と備え”を次世代社会へ活かしていきたいと願っています。その糧は森びと 60 歳代がさらに豊富化させて、脱炭素市民社会を生きる世代へ手渡すことができる 2024 年にしたいと思います。80 年後の森を想像して、「生存の危機」と向き合い、命を守ってくれるエコシステムの母体である森と寄り添う心得と備えを次世代社会の宝物にしたいものです。



多くの方々と森の手入れや森の散歩を通じて、足尾・「松木郷」が人間の心の“ふるさとの地”として親しまれることを祈っています。

私たち（スタッフ・サポーター）は、次世代社会に生きる若者たちに、足尾・旧松木村で人間が壊した荒廃地で山と心に木を植えて学んだ事や自然界と向き合う心得で「いのちと生活の大切さ」を案内致します。

運営委員 大野昭彦

森の木魂（こだま）



植樹地周辺マップ



栃木県・加賀



群馬県・柳澤



茨城県・斎賀



栃木県・福原



栃木県・山田



栃木県・田村



栃木県・矢口



千葉県・武田



栃木県・山内



栃木県・清水



栃木県・大野

100年の森づくりはこのメンバーが中心になってやっていきます。

守る！神宮の森

明治神宮外苑再開発による樹木伐採に反対！



エコ散歩 in 神宮の様子はこちらから
Youtube で“森びと 神宮”と入れても
見ることができますよ！



東京都に意見書を提出する桜井代表

●総会発言に基づき東京都への意見書提出を確認

明治神宮外苑の森は 1926 年に全国の人々による 献木・献金、ボランティア活動によって明治神宮の 森と一体となった森として造成され、今では樹齢 100 年を超えるクスノキやケヤキ、スダジイを主木 に、私たち人間を含む多様な生物のいのちの森とな っています。

再開発計画は外苑の神宮球場と秩父宮ラグビー場 を建て替え再配置し、高層ビル 3 棟の建設も予定さ れ、明治神宮や大手不動産など事業者は 2036 年の 完成を目指しています。

再開発により樹齢 100 年を含む約 1,000 本の樹木 が伐採・移植され、高層ビルや野球場整備によって イチョウ並木の生育に影響が出ることが懸念されて おり、地域住民はもとより、「日本イコモス」、音楽 家や著名人、若者たち、議員連盟など多くの方から、 「憩いの場が失われる」「日本を代表する文化的景観 が失われる」と不安や不満、反対の声があげられて います。

昨年 6 月 24 日に開催された第 4 回総会では、「樹 齢 100 年の樹木を含む約 1,000 本の木々が伐採され ることは、森に生きる生物や地中で森を支える土壌 動物など、自然の営み、生態系が破壊されること」 「私たち人間は森に生かされていることを理解し、 森を壊さないよう申し入れるべき」など多くの発言 を受けました。運営委員会では、数少ない都内の森 をなくすことは「灼熱の東京」にすることであり、 エコシステムを破壊する再開発は世界の温室効果ガ ス削減の取り組みに逆行するものであり、東京都へ の意見書の提出を確認しました。

昨年 7 月 24 日、小池百合子東京都知事に対し「神

宮外苑再開発による樹齢 100 年の樹木伐採に反対す る意見書」を提出しました。意見書の提出には桜井 勝延代表以下 3 名、東京都議会・山口拓議員他立憲 民主党議員に同席をいただきました。

桜井代表から、東京都の都市づくり政策部土地利 用計画課・課長に意見書を手渡し「経済活動の前提 は命をしっかりと支えること。そこを企業の原点と して、都民・あらゆる地域の人々の命を守ることを 前提として活動を進めるべきではないか。地上だけ の生物だけではなく、地下の生物の活動があって私 たちのいのちが保たれているということを事業者の 皆さんに理解していただくよう都、都議からも伝え て欲しい」と述べ、「東京都は、神宮外苑再開発にあ たってエコシステムの衰弱・破壊につながる樹木の 伐採を中止すること。また、電柱を地中化した地上 部や都内の廃屋跡地、遊休地に木を植え、温室効果 ガス吸収源の緑を増やすこと等、都民の森づくり運 動を実施すること」を要請しました。

東京都側からは、「皆さんの声は都から事業者に届 けていく。伐採を減らすために移植する先を広く探 せないか、生かせる木は生かそう。単純に切るの でなく、守れるものは守ろうとやっていきたい。そ のために知恵を絞っていく」と返答がありました。

神宮外苑の再開発は森の生態系を壊し、人類の生 存を脅かす地球温暖化にアクセルを踏むものです。 都市づくり戦略は樹木の伐採ではなく、二酸化炭素 吸収源の緑を増やし、森の多機能が発揮される森の 中での生活環境づくりです。持続可能な生存があっ ての人間活動が「都民ファースト」ではないかと思 います。

副代表 清水卓

守る！神宮の森 都市の緑も守る意思

「森びと」と私の関わりは、亡くなった松崎明さんに社会部記者として取材した 30 年程前まで遡る。分割民営化に揺れる国鉄の中でも、“鬼の動労”を率いた労働運動の闘士。松崎さんは、「組合は組合員の生活を守るためにある」という信念のもと、民営化後も当局と対立を崩さぬ他組合とは一線を画して注目された。生活を守ることは生命を守る事に通じ、松崎さんのこの姿勢は一貫して変えることはなかった。

足尾にせっせと通い、鉍毒で傷ついた木々の再生に取り組んだのも、松崎イズムの現れだと感じる。

私が引っ越してきた渋谷では、神宮外苑再開発問題が起こっていた。昨年 2 月には、東京都が再開発事業の施工認可処分を下したことで、反対論も急激な高まりを見せた。

近所に住む住民として、ちょっと調べてみただけで、この計画が多くの問題を抱えたまま進んできたことが判った。問い合わせた渋谷区、新宿区、なによりも事業者の対応がごちなく、どこか自信なさそうな口ぶり。これは何かが隠されているなとすぐに判った。

再開発計画では、美しい緑が残る外苑に、200m の高層ビルを建てるというのにまず仰天し、ラグビー場や野球場の乱暴な移設計画にも憤慨し、100 年かけて造られた人工の森が、数字の足し算引き算で伐採され移植され、人間都合の構造物に変えられることに驚いた。

分厚い『明治神宮外苑七十年誌』を手に取ると、明治以降、この地の帰属を巡って時に政府とも争った明治神宮が「理想の杜と公園を兼ねたエリア」とすべく取り組んで来た歴史が自負を込めて詳らかにされている。今回の再開発計画とは真逆の理想を明治神宮自身が抱いてきた事が判る。

何かできることはないだろうかと、思いついたのが、“足尾オラウータン”こと、「森びと」の高橋佳夫さん。高橋さんに、都市の公園でも緑が危ういと話すと、このオラウータンは外苑視察に出没し、「根っこの部分の小動物も、森には大事な生きもの」などと、はっとするような指摘。上ばかり見ず、足下も見よと。そして高橋さんは「我々は森に生かされ



外苑を視察する高橋佳夫さん (6/23)

ている」と強調するのだった。

「森びと」のメンバーも、すでに動き出し、計画見直しを求める要望書を取りまとめ、昨年 7 月に東京都へ提出、さらに 9 月には、東京農大中村幸人名誉教授の案内で、「地球灼熱化」と言われる猛暑の中、視察ツアーを実施。中村教授は、柵で囲まれた木々の中に「タブノキ」を発見。「人工の木々の中で、常緑の森に戻って行こうという先がけと見ることができる」と外苑の可能性を指摘した。



外苑再開発は、東京五輪の裏で一握りの関係者が人知れず進めるという透明性を欠く経緯を辿ってきた。その後、東京五輪は、スポーツの美名を利用し汚職にまみれたイベントだったことが明らかになった。責任者は誰も責任を明らかにしていない。計画を主導してきた東京都の小池百合子知事は、「事業者の進めている事だ」と、早くも逃げを打つ姿勢を見せる。

ふと、足尾を発祥とする「森びと」の取り組みが都心にも拡大する中に、「自然を守る」大事さを社会運動と結びつけて実践した松崎イズムをみる思いがする。

正会員 大山寛恭



森びとプロジェクト「エコ散歩」(9/10)

アドバイザーからの提言 森林(もり)の価値について



明治神宮外苑のタブの木と

温室効果ガスの排出権取引に見られるように、温暖化対策にも結局は経済至上主義がまかり通っている。炭素だけを環境問題としてクローズアップするだけでは深刻なこの問題を解決することはできない。規制だけでは気候変動は収まらない。

温室効果ガスと呼ばれる二酸化炭素は大気中で断熱効果をもたらし、地球から宇宙へ戻る熱エネルギーの放射を妨げてしまうのが問題となっている。すなわち大気圏内に閉じ込められた熱エネルギーが大規模な大気循環や海流の循環において悪さをしているのである。

原始の地球に生命が誕生し、生命は太陽のエネルギー(可視光線)を取り入れて物質を循環させる生態系という仕組みを作り、生物は多様な発展を遂げてきた。海域から陸域へと生物は進化、展開し、多様な生物社会を構成する森林を陸域に広げていった。

太陽の放射エネルギーは森林に取り込まれ、生態系の維持に使われたあと、ゆっくりと地球から宇宙へ戻る。そのエネルギーで生物圏が機能し、環境が安定する。この穏やかな青い地球は地球生命が作り出した唯一無二の惑星である。

厳寒の極致と乾燥した砂漠以外の陸域に占める広大な森林は熱エネルギーの収支と物質循環のバランスを保っていたが、現代における人類の台頭は陸域

の森林の消滅に繋がっている。現在、毎年520万haの森林が消滅しており、さらに異常気象による森林火災、土石流などによる斜面崩壊がそれに拍車をかけている。森林の減少により森林生態系が吸収してきた太陽の放射エネルギーが行き場を無くし、地球上をさ迷う結果となり、化石燃料由来の二酸化炭素の増加もあって温室効果が重なり、世界的な異常気象を導いている。

温室効果ガスの排出規制も大事であるが、失われた森林を再生することも重要である。森林は二酸化炭素を吸収して酸素を作り出す。太陽の可視光線を捕らえて有機物を作り出し、同時に熱を吸収する。水源涵養機能は水を安定的に司り、河川や海の生態系に豊富なミネラルを供給し、森林生態系は生物多様性のゆりかごとなる。

地球上に現存する森林はすべて保全し、その上で消失した森林を再生していくべきである。日本は国土の67%が森林で、質はともかく、先進国では多くとも自慢することではない。温帯に位置し、海洋性気候下にある日本列島は温暖で雨が多く、森への回復力が強いのである。そのような国土は地球上では極めて少ない。日本は世界の中で豊かな森を多く残す役割を負うべきであろう。

植生アドバイザー 中村幸人

足尾の森の仲間たち

足尾の魅力

星景写真を撮っていた私は、星空が綺麗な場所を求めて足尾に辿り着きました。足尾町が繁栄していた頃に発せられていた星の光が長い旅を経て、目の前で瞬く星を眺めながら、過酷な労働をしていたであろう坑夫達はどのような思いでこの星を見ていたのか？時には羽目を外して千鳥足で星空を見上げる日もあったのだろうか？などと考えながら、過去と現在が交差した感覚に耽る時間が好きでした。

足尾町に足が向いたのはそればかりではなく、町に残る坑夫たちの社宅跡や工場跡、松木溪谷付近には村を追われた村人の住居跡が当時の私には生々しく見えて、とても興味深かったからです

思えば松木溪谷に足を踏み入れ、ツキノワグマに出会ってからは休日の度に足尾に通い詰めています。その度に目に付いたのが森づくりをしている方々でした。溪谷を歩く殆どの方が男性でしたので、カメラを担いで写真を撮っている私は目についたらしく、足尾・松木沢での森づくりの話を知ると、その話はとても情熱的でした。特に、“人が壊した森は人が作らなきゃ森にならない”という話には衝撃でした。

それまでの私は、環境問題はどこか遠くの方がやってくれているのだろうという認識で、完全に他人事でしたし、森は自然のサイクルで生まれ変わって生長していると思込んでいました。

森びとの皆さんにお会いした当時の私は、自炊をしながら借りた社宅に泊まり込んでいる方々、栃木県内や群馬県内から手弁当で森作業している方々のボランティア精神丸出しの仕事ぶりに魅かれていきました。また、煙害の歴史を宿していると言われていたブナを長年保護している活動に誘っていただき、共に中倉山に登ってその活動を手伝うようになってから、いつのまにか私の心の中にも“木が植えられた”ような気がしました。この頃は、森びとの合言葉である“山と心に木を植える”という意味が分かってきたように思います。

煙害で何もかも流出した場所に木を植えるという事は、まず土を選び、土留めを作らなければなりません。その足場というと夏は下草で見通しが悪く、

冬は残雪でとても危険です。植える木は幼木なので下草が元気に育っているからと放っておくわけにはいかず、幼木に陽を当てる為に灼熱の太陽の下で草を刈らなければなりません。この地で森を育てるという事は、木の成長に人間が合わせる必要があるという事です。その結果、ハゲ山になる前の樹々を短時間で生長させているシニアの方々と、その後の世代の想い描く森づくりは遺していかなければと思うようになりました。

私にできることは、森と生きていく森びとたちを記録し、動画配信をしていくことくらいですので、少しでも世界の人々の記憶や心に残り、森は生物にとって大切な支えだという事を感じてほしいと願っています。世界中の人々が温暖化による異常気象で生活が脅かされていますが、温暖化を考えるきっかけに繋がれば幸いです。

松木溪谷入口の森はまだまだ若い森ですが、森の中ではドングリを啜って走り回るネズミやテン、アナグマ、時には熊もやってきて、様々な表情を見せてくれます。その表情は彼らの日常のほんの一瞬に過ぎないのですが、厳しい自然界で命を繋ぎ、営みを支える森になっている事がとても嬉しく思います。

森に住む動物達の命の物語を撮りながら、この先もこの森の成長を見守っていきたいと思います。

広報サポーター 橋本貴子



森びとのインスタだよ→
←Youtube は森ともチャンネルで発信中!



足尾の森から

樹徳高校の皆さんを迎えて

昨年8月21日、群馬県樹徳高校の環境学習が足尾・松木村跡地で行われ、森びとはそのサポートをしました。コロナ禍で活動の自粛を余儀なくされていたので、5年ぶりの開催となりましたが、高校生7名と教員3名が参加をしました。

生徒たちは2005年に植樹を開始した「白沢の森」、2014年から植樹を開始した「民集の杜」を観察し、昼食後にそれぞれが感じたことを出してもらいました。木を植えること、森を育てること、その森に人間が生かされていることを高校生と共有できたのではと思います。そして、この学習が若者たちの将来社会を考えるきっかけになればと願っています。



● 樹徳高校の皆さんの感想から

足尾の山の現状を見てとても驚きました。植樹している部分の緑の美しさとしていない部分の対比が何とも言えない感情を引き起こし、こんなに違うのか…と、違いを受け入れるのに時間がかかりました。また、木々の生長速度に驚かされました。自分の生まれた年に植えられた木々がとても高く伸び、森をつくり虫や動物たちと共存している姿を見てとても感動しました。

植樹はとても大切なことで、これからもこの素晴らしい活動を続けていきたいです。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。（高3女子）

今日の足尾のフィールドワークを経て、普段の学校生活や本やネット等から得られる情報を超えて実際に触れて見て自然を体験することが出来て非常に貴重な時間でした。特に、過去の先輩方が植樹された木々などは既に幹が太く、しっかりと根を張って空を全て覆ってしまうほど成長していて、とても美しく思えました。そして最後に意見交流をした際に

運営委員 小林敬

森びとさんから、十数年植樹をやってもまだまだ緑の範囲は狭いと仰っていたので、一時期の自然破壊の影響が数十年に渡って残っていく事が再確認でき、より長期的な視点で自然を見る必要があると思いました。非常に貴重な一日になりました。ありがとうございました。（高2男子）



現在、私たちは避けられない気候変動の影響に直面しています。春と秋の期間が短くなり、気温や海水温の上昇が生態系に大きな変化をもたらしています。

樹徳高校では、2015年から足尾での森づくりを推進してきました。その結果、足尾の森は驚くべき成長を遂げています。足尾は環境教育に最適なフィールドであり、過去、現在、そして未来について学びを深めることができます。また、足尾の森づくりを通じて、人づくりも重視しています。五感を駆使して自然を感じる事が、環境教育の目的です。現役高校生たちは、京都議定書が制定された後に生まれ、環境問題が世界で叫ばれてきた時代に育ちました。彼らは先人たちが引き起こした問題のツケを私たちが払っているという感覚を既に抱いています。地球の未来に対して、高校教員として、また大人として果たすべき責任を深く感じています。

私たちは、足尾の森が成長するまで関わり続けることができました。この場を借りて、森びとプロジェクトの皆様から感謝申し上げます。今後も、高校生の五感を刺激することで価値観や人生観が変わるような機会を提供し続け、環境についての理解を一層深めていきたいと思っています。

樹徳高校教諭 広井勉

会員からの声

森を育て、自然と人間を大切にすることを育む



白沢の森入口にて

私たち J R 貨物労組は、J R 貨物で働く仲間が組織する労働組合です。J R 貨物は、北は北海道から南は九州までの全国ネットワークにより日本の物流の一翼を担っています。鉄道貨物輸送は輸送効率と環境負荷に優れており、貨物列車 26 両分は 10 t トラック 65 台分で、輸送単位（貨物 1 t を 1 km 輸送する）当たりの二酸化炭素排出量はトラックの約 11 分の 1 となっています。この輸送を職場で担っている私たちが労働組合として、「森びとプロジェクト」の「森づくりを通じて自然環境と人間の生命を大切にすることを育む活動」に賛同し、「いのちの森づくり」を実践してきました。

足尾銅山跡地にある白沢の森には、貨物労組が 2 年前に 249 本の苗木を植樹した「貨物の森」と呼ばれるエリアがあります。しかし、コロナ禍での行動制限などにより下草刈りができず、苗木の発育は思わしくありませんでした。私たちは昨年 9 月 30 日に 9 名の組合員が参加し、下草刈りを行いました。当日は、朝から小雨が降る中、鎌や刈込鋏を持って 400 段の急な階段を上り「貨物の森」に茂った人の背丈ほどの雑草を 2 時間かけて刈り取っていきました。刈り取った雑草の下では、2 年前に植樹した苗木が生きており、参加者たちは自然の力強さを実感しました。この山を豊かな森に戻すためには、私たちが継続して手を加え、整備していく必要があります。

昨今の異常気象により各地で発生する大雨や夏の

酷暑は、野菜や米の収穫量に影響を及ぼしており、これは J R 貨物の輸送量、更には私たちの生活にも大きく影響が及びます。また冬眠しない熊の出没や野生のシカが人里に現れ、人への被害や列車と衝突するなどの問題も顕著となっています。

下草刈りに参加した仲間は、地球の温暖化・沸騰化は人類の経済活動の結果であり、生命に直結する問題として捉えることを学び、「地球温暖化を食い止める力になりたい」「地球環境について組合員に伝える」「次は若い組合員と参加したい」などの感想を出し合い、継続した取り組みに向けた思いを新たにしました。

貨物労組は引き続き「いのちの森づくり運動」を展開し、地球環境を守り自然を大切にする仲間を広げていきます。

J R 貨物労組 岡孝行



お茶会レポート

農民、労働者の闘いの歴史を森づくりに活かす



同和労組のみなさんと



今年の夏以降はシニア生活のスタートになります。65歳を迎えて、これまで培ってきたことを世話になった次世代に何かを伝えたいと思っています。とは言っても現役時に属していたネイチャークラブの延長線上のことくらいなので、気候変動による気象災害を何とか和らげられるような森づくり活動に専念したいと思っています。私が住む青森県から、栃木県日光市足尾の森づくりに専念したいと思ってもそれは不可能です。

そこで何度か参加してきた DOWA ホールディングス(株)主催である秋田県小坂町の「小坂・ふるさとの森づくり」を応援できないかと思い、主催者へ問合せをすることにしました。私にとっては自分で地域活動を一からつくりだすことが初めてなので、森びと秋田県ファンクラブ(以後、秋田 FC と略)の仲間たちに相談してきました。

この森づくりは宮脇方式で進められ、八幡平での森づくりで体験してきたことが活かされるのではないかと思います。問い合わせをしたところ、可児義雄さんの供養で知り合った労働組合の方と連絡が取れ、昨年10月に私たちは同和労組三役及びOBと話し合うことができました。私にとっては忘れられない2023年の10月になりました。

新年を迎えるに当たって私は、頭から離れなかった同和労組の方々との話合いができたことを考えてみました。思い浮かんだことは、現役の頃、花岡事件踏査の案内の手伝いをしていた時に知った、1919年頃の労働争議です。当時の鉱山労働者と経営者の藤田組との闘いはストライキに発展し、鉱山側は労働者側の要求の大部分を受け入れました。1923年7月には、農民の煙害賠償要求運動が起こり、それは鉱山労働者と共同闘争になった小坂鉱山争議に発展しました。小坂鉱山争議を指導したのは可児義雄という人物でした。彼は、足尾銅山の争議で投獄を経験した後、小坂・別子等の鉱山争議や秋田県阿仁前田村の小作争議を指導しました。1929年11月の争議では、地主側、裁判所、武装した警察と自警団等が一体となって農民の闘いに襲い掛かり、双方に多数の負傷者が出ました。これ以上の犠牲者は出さないとした可児義雄らのリーダーは自首して乱闘を治めました。その後、可児は懲役2年の判決で獄中生活、出所後の1935年1月9日結核のため40歳で亡くなりました。また、可児は小坂鉱山煙害運動歌を作り、この歌は村民がこぞって歌っていたと言われています。村民は、可児を“農民の父”、“現代の義民”と呼んでいたそうです。それ以降、この“義民”供養が村民と5月1日に毎年行われています。

私は、この村民と労組の供養に毎年参加していました。振り返ると、「供養会場には村人以外の男がいつもいるなー！」と、村民と労組関係者は感じていたのかもしれませんが。農民と労働者の共闘に魅かれていた私の心と地元の皆さんの心が一つになっていたとすれば、これからの活動にとって忘れられない大切なことではないかと思っています。

“山と心に木を植える”の合言葉の意味を噛みしめて、シニア世代の人生を掴みたいと思い、秋田県 FC は帆を掲げていきたいと思っています。

秋田県ファンクラブ 高杉貢

お茶会レポート



2度のお茶会開催で気が付いたこと！

県ファンクラブは、「お茶会」を昨年の那須塩原市での開催に続き、今年は栃木市で開催をしました。その中で気が付いた点を明確にし、今後の参考にさせて頂ければ幸いです。

「お茶会」は、「フォーラム」とは異なった形で開催していこうと考え、①多くの人を集めなくてもよい。②異常気象の経験や、不安に思っていることなどを肩肘張らずに述べてもらう。③それを通じて、地域の皆さんがどの様な思いを持っているのかを知る。④知識や理論で”頭でっかち”になっている自分たちの問題意識を整理すること。⑤そして、今後どうして行けば良いのか。その対策を皆で考えるというものでした。

初めて開催した一昨年は「お茶会」をどう創り出すのか戸惑う事ばかりであり、ぶっつけ本番・出たところ勝負の状況の開催となってしまいました。結果は、若い参加者から「論議が経済問題に進んでしまった」との感想に象徴されたように「何を論議するのか？」が見えないまま終わってしまう始末でした。

今年の第2回目は、「孤高のブナ」保護活動に毎回参加してくれている荒川光司さんとその仲間の5名に参加して頂き、全体で12名の参加で開催しました。しかし、開催日時等の決定は早かったものの、詰めの話し合いは開催間近となってしまい、もっと早くに論議を深めていけばと悔いが残りました。

話し合いのテーマは「温暖化による異常気象の中で、未来に生きる子供たちにどの様な社会を残すのか？」とし、自己紹介の後「今、自分にとっての危機とは何か？」を喋ってもらいました。その中では、豪雨によって床上浸水した経験談や、「100年に1

度の豪雨」の繰り返しで、今まで予想できない水害が発生している等の意見や、都市部ではアスファルトで地表を覆ってしまっている事の問題。また、若い人たちを中心にスマホにとりつかれたようになっていっている。気候変動で電気代がどこまで膨らんでいくのか、昔のようにつましい生活をすることも必要等の意見が出ました。子供たちの未来のためにどの様なことを今私達はしなければならないのか？の議論では、①ボーイスカウト活動をしていて、キャンプなどを通じて子供たちに自然と触れ合ってもらっている。五感を養う教育を。②自分で使うエネルギーは自分（達）で創ろう。③（針葉樹）主体の林業から広葉樹への転換を。④職場でアスファルトを剥がして芝生にしている。家庭でも実行してはどうか。等々が出されました。

お茶会後に聞いた参加者の感想では、①皆さんから多くの意見を聞いて大変良かったが継続が必要。もっと議論を深めたい②まじめな人たちが集まり良い会だが、エネルギー問題を論議していて、エアコンで部屋が寒かった。行動が伴わないと③「今まで洪水は起きていない」そんなデータは今、あてにできない。そんな考えは危険だ④都市の中では、アスファルトで地球に蓋をしているようだ。3人が同意見で繋がった。⑤こうした意見交換の場所がないと気づくこともない。「地球にとって人間は、がん細胞の様なものではないか！」という意見が印象的でした。

問題は「お茶会をお茶会だけで終わらせない」ことだと思います。日々の活動の中で意識をしながら、交流を続けていく事が大切な事だと実感しています。それは、2度のお茶会に参加された皆さんが、ブナ保護活動に参加してくれたり、カンパを寄せてくれました。また、森びとの活動を新聞記事で知り、メンバーが声をかけて3名が新たにサポーターになってくれ、足尾での森作業を担ってくれています。「行動しなければ、何も変わらない。行動すれば何かが変わる」との思いを持ちながら、残された人生を生きていけたらと思っています。

栃木県ファンクラブ 橋倉喜一



お茶会レポート

昨年の眠れない夜を乗り越えて！



前回（一昨年）のお茶会では、開催する日程をこの日にしよう決めてから、本当に市民が集まってくれるかが心配でした。参加してくれる市民に配布する資料はどれを使おうか、話がうまくない自分が話す内容で本当に伝わるのか、そのようなことが一番頭を悩ませました。この地球温暖化に関する資料で分かってくれるのか、こっちの資料の方がいいか散々悩み、夜もなかなか寝れなく、話し合いをやっている場面まで夢の中にまで出てきました。昨年の反省点も含めて、事前にファンクラブの中で議論し、使用する資料を決めました。

今回は、和田浦町コミュニティセンターにて「お茶会」を開催し、11名の方々が出席してくれました。意見交換では、千葉県の9月は、線状降水帯発生によって今までに経験したことのない豪雨に見舞われました。参加者からは、「和田浦に50年住んでいるが、このような大雨を経験したことがなく驚いた」、「大雨で、自宅の庭まで水が入り驚いた」、「雨がひどくならないうちに、高齢者の家に行き避難させようと話している間に雨が強くなり驚いた。近所に高齢者がいるときは早めに避難させる」、「避難所まで行くのも大変」等の意見が出されました。今回の大雨で、水の威力・自然の脅威が

とても恐ろしいと実感し、いかに人間は無力なものと感じました。山が荒れていると感じていますが、具体的に何をやればいいのか見当が付きませんし、川の水路はどこでもコンクリートで造られ、道路も舗装されており、砂利道や土の道はほとんどありません。一たび豪雨が降ると道路は川のようなります。大人の課題は、若い人たちにどうやって今の地球温暖化や異常気象の現象を伝えていくか、です。

温室効果ガス（CO2）をいかに減らしていくか、政府は一刻も早く削減する方向を示し、化石燃料から再生可能エネルギー（風力・水力・太陽光・地熱）に切り替えていく緊急に実行する姿勢が問われています。子供たちに明るい未来を届けるために、国民一人ひとりが真剣に何ができるか考え、この地でもできることからやっていくしかないと考えています。政府の姿勢と政策が私たちの生活とどのように関連するかを見極め、私たちの声やヤル気を示していかなければなりません。“行政に言う事は言い、私たちがやるべきことはやっていかなければならない”。ということが参加者の心に伝わったように思いました。今後も継続した市民との話し合いを続けていこうと思っています。

千葉県ファンクラブ 武田芳明

お茶会レポート 気候変動を考えるお茶会！



昨年の8月26日に、第2回東京都ファンクラブお茶会を開催してきました。

3月7日に東京都FCの役員会を開催し、第1回目のお茶会以降の活動が停滞してしまっていることを反省点として、第2回目のお茶会をどのように進めていくのか話し合い、議題は、(1) DVD鑑賞《2030 未来への分岐点1》▽暴走する温暖化脱炭素への挑戦。(2)神宮外苑再開発を考える。で取り組んでいくことにしました。

当日は11名が参加をしていただき、1時間強のDVD鑑賞の後、参加者から意見・感想をいただきました。

○気候変動や地球温暖化が進み知変な事態になっていることは受け止めているが、どのように広めるのか？ヨーロッパ人に比べて日本人はお人好しで他人任せの所がある。

○ゴア副大統領時代に地球温暖化問題がクローズアップされた。でも日本では広まらなかった。自分に何ができるか悩む。

○お茶会を森びとがやっているが、参加者が前回より少ないのはなぜか？

○若い人に、森びとの活動や温暖化問題を伝えることが出来ていないのが課題。

○今までは関心のない一人だったが、過去には足尾で植樹に参加したことも少し意識が離れていた。どう向き合って広めていけば良いのか考えさせられた。

○平和の取り組みは、それなりの団体があって進められるが、森びとは大変。会員になっているが活動には積極的でなかった、広めるために何ができるか考えていきたい。

○ビデオを観て感じる場所があった、色々考えるが行動できない己。温暖化問題もしかり何ができるか考えていきたい。

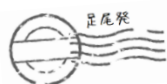
○現実から問題を掴み取り、酷暑の中での野外作業。命を守るために何が問題なのかはっきりさせることが大事ではないか。等の率直な意見が出されました。

神宮外苑再開発については、森びとプロジェクトが東京都に提出してきた意見書を基に議論しましたが、温暖化について時間をかけた為に議論を深めることができませんでした。今後も東京都に住む一員として議論を継続し、できることを行動していきます。

私たちにとって地球温暖化の問題は避けて通れないことを理解できたと思います。身近な課題から温暖化を考え、出来ることから始める。森や海に人間は生かされていることを忘れないで生態系を変化させる行動を慎む意識を育てていければ良いと思います。

第2回のお茶会に参加された皆さん、貴重な意見有難うございました。これからのお茶会活動に繋がっていきますのでよろしくお願ひします。

東京都ファンクラブ 岩田欣吾



足尾発！ 新メンバーの紹介

来年 2025 年は足尾で森づくりを開始してから 20 年を迎え、各植樹地はいのちを守る森になってきました。これは先輩方が、地球温暖化にブレーキをかけるためにコツコツと自然と向き合い、時にはスタッフ間で侃侃諤諤の議論をし、“山と心に木を植える”活動へ情熱と愛情を注いでこられた実践があったからです。その先輩方も 70～80 代になってきました。森びとでは数年かけて 50～60 代へバトンタッチをしていきます。今回は足尾で新しくサポーターになられた次世代の方々を紹介していきます。会員の皆様、どうぞ宜しくお願い致します。（①年齢②出身地③趣味④森びとの活動に参加するきっかけ⑤意気込みや抱負）

■山田浩（やまだひろし）



①62 歳②栃木県日光市③ゴルフ、山登り、そば打ち④孤高のブナとの出会い⑤森びとを継続していくことができる若手の育成をしていきたい

■山内健人（やまのうちたけと）



①58 歳②兵庫県神戸市③草刈り、伐採④下野新聞の記事⑤なかなか作業に参加できず申し訳ありません。今年防災士の資格を取りました。森びとのフィールドである渡良瀬川源流域の植林が私の住む下流域(佐野市)の防災につながることを、諸活動を通して広げたいと思っています。

■田村一（たむらはじめ）



①62 歳②栃木県宇都宮市③登山、写真④昨年 4 月の中倉山ブナ保護の新聞記事を見て⑤5 月～毎月活動に参加をしています。会員の皆様の森づくりへの

深い愛情に触れながら見様見真似で参加してきました。未来の子どもたちのために何かお役に立つことができたら本望です。

■矢口益巳（やまぐちますみ）



①68 歳②栃木県鹿沼市③旅行、登山、マラソン、花・草・木を育てること④登山などを通じて、松木村の廃村の歴史や煙害による自然災害に関心がありました。昨年 4 月 29 日の中倉山孤高のブナ保護活動の新聞記事を見て、森びとと他団体との取り組む姿勢の違いに賛同して参加を決意しました⑤サポーターとして参加する中で、使い込んだ道具などを見ると、これまでの苦労や歴史を感じることがあります。今やっていることが形となって残るよう、数多くの活動に参加していきたいと思います。

■本間正憲（ほんままさのり）



①76 歳②山形県③登山④サポーターの山本勉さんから紹介されました⑤子や孫の時代が気になります。入会して半年が経ちますが、森の大切さを知りました。長く活動に参加していきます。



南相馬発

2024年・南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊の取り組み



一昨年からロシアによるウクライナ侵攻は今もなお、出口のない戦争が続いています。そればかりではなく、中東ではイスラエルによるハマスへの攻撃で、多くの罪もない市民が亡くなっています。

国連のグテーレス事務総長は「地球沸騰化の時代」と警鐘を鳴らしています。地球温暖化が進む中、私たち南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊（以降、応援隊）も少しずつではありますが、地域の方々に海岸防災林再生活動と地球温暖化防止活動を推し進めていくことを全員で確認し、活動を進めています。

早いもので、昨年6月に南相馬市鎮魂復興市民植樹祭も第11回目を迎えることが出来ました。また応援隊も発足9年目を迎え、代表は初代の西銃治さん、二代目の渡部俊一さん、そして私が三代目になります。9年間におよぶ応援隊の活動ができたのは、森びとプロジェクトや南相馬市鎮魂復興市民植

樹祭実行委員会や植樹ボランティアの方々などの大きな協力があったからこそだと考えております。心から感謝申し上げます。

今年の応援隊の活動については、従来の育苗苗場でのポット苗の育苗などの作業から、今まで植樹した11か所の植樹会場の維持管理等と植樹会場を巡る「南相馬森の案内」の2つにシフトを移していきたいと思えます。その要因は会員の高齢化にあります。

今月末には第12回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭に向けての実行委員会が開催されます。今年から南相馬市伝統行事の相馬野馬追いの開催期日変更に伴い、市民植樹祭の開催期日の変更が余儀なくされると思えます。そのような状況ではありますが、市民植樹祭には多くの森びとプロジェクト会員や地域の方々の参加を心からお願い致します。

南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊 松林英夫



ミノムシ

昨年8月に、2005年から足尾での森づくりを物心両面でサポートしてくれているJR東労組の佐藤委員長をはじめリーダーが森の観察に来てくれた。その1人のコメントを紹介し、労働組合としてのこのような問題意識をもってくれていることに感謝したい。

『12月に入り寒さが本格化し、朝晩の気温差が拡大する一方で、汗ばむ陽気の日もあり戸惑いを感じる。気象庁によると、16日には全国21地点で最高気温が観測史上最高を更新した。関東地方で12月中旬以降に夏日を記録したのは観測史上初めてである。地球はもはや温暖化時代ではなく沸騰化時代とも言われている。「異常気象」や「数十年に一度」「観測史上初」などと稀に発生するはずのことを耳にすることが頻繁に起こっていることに私たちは慣れてしまっていないだろうか。私たちの課題は自然に生かされている自覚のもと現状を正しく把握し、CO2削減に向けた植樹など自分自身が行動することである。それは人間らしく生きていくために必要なことであり、同時に平和な社会を希求していくことでもある。一部権力者の利益のために戦争によっても自然破壊が行われ、人間が生きる環境を奪われていくことを許してはいけない。主体的に捉えれば変えるべきは政治であり、変わるべきは自分自身の意識・行動である。人間らしく生きるために共に実践する仲間を拡大していこう。』

運営委員 小林敬

編集
後記

「森は友だち！」のかるたをつくろうと運営委員会で提案がされました。「つる舞う形の群馬県」の上毛かるたは、群馬県人なら知らない人はいないと言われているほど（群馬県内で）有名ですが、森びとの思いを込めた楽しい創作かるたができれば面白いですよね。

例えば、俳句調だと、「（き）をやまと ころろに植える 森のひと」なんてどうでしょう（そのままじゃないかと突っ込まれそうですが!）。「（お）かしいね 植えるからって 伐るなんて」「（う）えたいな 日本じゅうを 木の国に」「（え）えほんと! ブナの実って 旨いのね」「（よ）のなかに 木を植え続けた 昭さん」・・・結構考えるだけでも楽しいかも。あ、これ、大好きな川柳のノリでした・・・笑。



創作かるたのサイトを少し調べてみましたが、読み札の文句は、俳句調の他に、五七調、七七調などがリズム感があって良いそうですが、

そうでなければいけないわけではなさそうです。まだ公募するかも決めてませんが、これは!と言うものがございましたら是非事務所に送って頂ければと思います。先に絵心や写真のテクニックがあれば絵札でも良いですけどね。みんなで楽しめたらいいなあ。「辰のとし二つの足で森に立つ」遅くなりましたが本年も宜しく願います。（運営委員 小黒伸也）



森の木魂(こだま) 第12号 (2024年1月24日発行)



発行：森びとプロジェクト
発行人：桜井勝延
編集人：森びとプロジェクト編集委員
第一版

〒141-0031

東京都品川区西五反田 3-2-13 3F 303号室

TEL&FAX 03-6417-3750

<http://www.moribito.info/>

Email info@moribito.info

